



祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報 第83号

てんまてんじん



本年の天神祭	2 頁
天神さんと梅干の「核」	3 頁
鎮花祭	4 頁
境外の天満宮・天神祭(二)	
天兒屋根命神社の「天満宮」	7 頁
「天神祭と都市の彩り」	
大阪くらしの今昔館企画展	
10 頁	

本年の天神祭について

大阪天満宮宮司 寺井種治

本年の天神祭の斎行については、新型コロナウィルスの感染状況、祭を実施するに当たりどのような対策を取るのかという事を、常に様々な情報を収集し検討して参りました。その結果、もちろん感染に十分注意しながら状況に合わせた対策を取る事で、コロナ禍以前の、つまり完全な形での天神祭を斎行する方向で諸準備を進める事となりました。

今から大川に浮かぶ百隻を超える船列と水面に輝く奉納花火を想像しながら感極まる思いであり、やっとここまで来たかという気持ちで一杯です。しかしながら、斎行するとなると数えて四年ぶりの船渡御、奉納花火となり、確認すべき事や申請事項や、各方面と折衝や依頼しなければならない事が山ほどあり、諸準備に追われております。

御協力、御協賛していただいている皆様にも本年の天神祭の概要をいち早く伝えなければなりません。この三年間で多くの物が値上がりして

いるという事実もあります。また振り返るとこのコロナ禍の三年間という期間は私達にとって本当に多くの事を考える機会ともなりました。感染対策はもちろんですが、神社の役割や「祭」の意義と大切さ、人と人が触れ合う事が難しい状況で、氏神を実施するに当たりどのように対策を取るのかという事を、常に様々な情報を収集し検討して参りました。そこで、もちろん感染に十分注意しながら状況に合わせた対策を取る事で、コロナ禍以前の、つまり完全な形での天神祭を斎行する方向で諸準備を進める事となりました。

天神祭とは、御祭神である菅原道真公を中心には、神社と氏子崇敬者が共に大阪の夏枯れを払拭し人々の暮らしの安全と平穏を祈る祭であり、千年を超える歴史を有する祭であります。この天神祭を行なう事が我々の誇りであり、未来永劫続けて行かなればならないものだと思つています。

江戸時代の天神祭では、七月二十四日の宵宮に多くの地車が宮入りし、最盛期の安永九年には八十四輪もの宮人が記録されています。しかし幕末・維新期から減少し始め、明治中期には現存の三ツ屋根地車一台を残すだけとなりました。この地車は、明治二十九年に当宮へ奉納され、以後は、毎年の天神祭に境内に飾られましたが、平成三年からは、七月二十五日の陸渡御の列に加わって曳行されています。

令和の御代になると、御即位を記念して新調の計画が発案されたもの

規模を縮小しながらも陸渡御を行うなどして取り組みました。

私達の意識も「コロナ禍だから仕方ない」という気持で妥協したりしない様、常に前向きに取り組むようにして参りました。そして何とか再開できる日を待ち望み、本年の完全な形での天神祭に向けての決意に至りました。皆様と共に心をひとつにして、本年の天神祭を斎行したいと思います。どうか宜しくお願ひ致します。

去る令和二年三月二十六日には斧始め式が執行され、令和三年の天神祭が終わった翌日七月二十六日に旧地車の曳き納め奉告祭が斎行され、その後、完全復元新調という形式で製作が進められました。そして令和四年六月二十四日に完成した地車は奉納宮入を果たしたのです。

当日は天満市場において清祓式を行い、神職の手によって曳綱が結ばれ、天満市場から天神橋筋商店街を初曳行した新地車は、旧天満青物市場を経て大阪天満宮へ宮入しました。多くの天神祭関係者と他地域からの地車ファンが待ち受ける境内へ賑々しくも勇ましい地車囃子とともに多くの参拝者に龍踊りとともに披露されました。昨年の陸渡御に初めて供奉した新地車が、往古の天神祭を象徴する存在として一際勇ましく輝いていたように思いました。

新調地車 初陸渡御

表紙解説

天神さんと

梅干の「核(さね)」



『株東農園・五代庵』提供

まれたという記録もあります。天暦三年(九四九)に当宮を創祀された村上天皇が、梅干を服用されていたとは御縁ですね。

天神様・菅原道真公は、この『医心方』献上の八十年前、延喜三年(九〇三)に薨去されていますので、果たして、菅公御生前の時代に梅干が広まっていたか否かは不明です。

「核」の中に寝る天神様

という訳で、先のご質問にはお答えしかねるのですが、天神様と梅のみなべ町の「御神園(梅園)」を紹介しました。同園は当宮が(㈱)東農園に管理を委託し、毎年のお正月に、その梅実を縁起物「幸梅(梅干)」として授与している旨を付記したところ、面白いご質問が寄せられました。

（天神さんが梅花をお好きだったことは有名ですが、梅干もお好きだったのですか？）というお尋ねです。

東農園の紀州梅専門店「五代庵」の

サイトによれば、この核(仁)には、「殺菌効果や目のかすみ、喉の不調、疲労回復、デトックス効果など」の効能がある反面、「アミグダリン」という有毒成分があるので、大量に食

になるそうです。右の箴言は、核に含まれる有毒成分への注意喚起だったのですね。

平安中期の「梅干」は薬用

梅干についての最も古い史料は、わが国最古の医学書『医心方』です。同書は、平安中期の貴族で医師でもあつた丹波康頼が、永観二年(九八四)に朝廷に献上した書で、そこには、薬用の梅干が記されています。

加えて、村上天皇が病気治療のために、梅干と昆布を入れたお茶を飲

いう安心の補足をされています。

右の箴言は、江戸中期の滑稽本『古朽木』(一七八〇年成立)にも、

次のように引用されています。

梅干も好きで、歯の達者な時は小

さくね、今は何者の云い出しても

梅を食うとも種くうな、中に天

神寝てござる」と、戒むる程のこ

となれば。

「核」が「種」に変わっていますが、こ

こはやはり「核」でなければ、なぜなら「核」は、「道真」の「ざね」に響か

せているのですから。

「核」から生まれた天神様

では、核の中に天神様が寝ていらっしゃるという奇想天外な発想はどうから生まれたのでしょうか？ 単に有毒成分への警鐘なら、天神様を持ち出すまでもないのですから。

そのヒントは南北朝時代の貴族・北畠親房が著した有職故実書『職原抄』(一二三四〇年成立)の次の記述にありました。

菅家は天神なり。心は菅家は天神ばかり大臣に任じ給う。懇じて、

菅氏は参議を極管とする故に。天

神の父をば是善と云うなり。或い

は梅の核より生じ給うと云々。天

神の養父・是善卿、参議まで任せ

少し乱れた文脈なので、次のように整理して文意をとりましよう。

菅原家の歴代は参議が最高の官職であつたが、天神＝道真公だけは

(右)大臣にまで昇任されたから、菅

原家と言えば天神のことだ。道真公の父は、やはり参議になつた是善卿だが、道真公は梅の核から生まれたともいわれている。

なんと、天神様は核の中に寝ていらっしゃるどころか、その核からお生まれになつたという伝承なのです。

菅公の化現説話

そういえば、各種の『天神縁起絵

卷』の冒頭シーンでは、突如、幼少の道真公が是善邸に化現し、是善卿と初対面する場面が描かれます。道

真公が是善卿の御子である史実を否定するかのような逸話です。

これは、天神様が日本史上初めて

実在の人物でありながら神として祀られたことに関わります。人間が神となることの整合性をはかるために

生まれ出された逸話なのです。荒唐無稽にみえる伝承であつても、その底には先人の深い想いが眠っているのです。その意味では、「核から生まれた天神」も、同様の計らいによる伝承だと理解しておきましよう。

鎮花祭雅樂奉納

万花咲き誇るこの季節は、人々の心もつい緩みがちで、様々な災厄が生じやすい時期でもあります。

私たちの祖先は、これを花の精靈の仕業と考えました。そこで奈良時代の「神祇令」において、舞い散る花に乗って四方に飛び行く精靈を鎮め、国民の平安を祈念する「鎮花祭（はなしづめのまつり）」が国の公祀として規定されました。

当宮でも、これに倣い、古来嚴肅に「鎮花祭」を斎行してまいりました。今年も四月二十五日の祭典を中心に、雅楽・奉納武道演武・舞踊等様々な神賑行事が奉納されました。



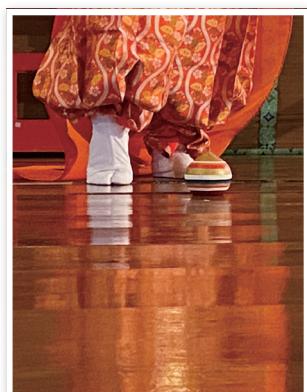
四條流式庖丁

神楽 大阪天満宮神職巫女
浪速神楽 「式神楽」管絃 大阪天満宮神職
平調 音取 「陪臤」
黄鐘調 国歌 「君が代」

浪速神楽 「鈴扇」



神楽 「紅わらべ」



舞樂 「敷手」

（通釈）我が浪速管廟吟社は金蘭の
ような契りはありません、必要がない
といえます。風雅の道自然と結び
逢う者で詩酒を獻じて和やか、これ
も神さまの成されるところ、白雲
(友)がどどまるようです。

二月課題 村閭探梅

鵬城 北野修司 大阪市

潤水回村映野梅 呼春轉轡翠禽來
欲迎高士整香馥 疎影橫斜近満開

（訓読）潤水村を回つて野梅を映じ、
春を呼ぶ轡轉、翠禽来る。高士を迎
えんと欲して香馥を整え、疎影横斜
満開に近し。

（通釈）村を回る水溝にも梅が映り、
のである。

（自注）金蘭一同心の契りを金蘭の
契りという。「繫辭下傳」に見る。

（通釈）我が浪速管廟吟社は金蘭の
ような契りはありません、必要がない
といえます。風雅の道自然と結び
逢う者で詩酒を獻じて和やか、これ
も神さまの成されるところ、白雲
(友)がどどまるようです。

三月席題 村閭探梅

未醒 梅津史子 京都市

晴暖風飄田里春 流鶯寄興報家人
曳筇隴畠草芽軟 更欲芳梅山足巡
（訓読）晴暖風飄す、田里の春。流
鶯興を寄せると、家人に報す。筇を
曳く隴畠、草芽軟らかなり、更に欲
す芳梅 山足巡る。

（通釈）風もゆるやかに吹く田舎の
春、流鶯の啼くさまが良いと歌人が
教えてくれる。筇(杖)をひいて畦道
をあるくと、草の芽が軟らかであり、
さらに梅の花を探つて山麓をあるく

御題 友

不孤 松村暁二 八尾市

吟社金蘭無契文 自知風雅與交欣
獻酬詩酒百千萬 無限神功停白雲

（訓読）吟社金蘭の契文無きも、自
ずから知る風雅と交欣と。詩酒を獻
酬すること百千万、無限の神功白雲
を停む

（通釈）小さな村落に庶民の家、美
しい鳶の鳴き声が聞こえてくる。早
朝の山には梅の便りの香りがし、う
つとりとしながらお茶を飲むのであ
る。

泥舟 杉谷孝博 宮津市

寒村風治野人家 潤艶鶯聲情亦加
曉色山香梅信早 恍然盡日靜煎茶

（訓読）寒村の風は治し野人の家、
潤艶たる鳶声、情亦加わる。曉色山
香、梅信早く、恍然として尽日静か
に茶を煎る。

浪速管廟吟社詠草

雪稜 松村暁二撰

鳶が春を呼ぶ。高士の風情のある梅、
その疎らな影と枝振りに満開の近い
ことを知るのである。

三月課題 早曉聞鳶

広報室だより

◆お正月の花手水

令和五年
の年明けは
コロナ禍の
暗いイメージを一新す
るかのよう



に、フラワー
アーティ
スト高橋弘
実様に手水
舎の装花演出をしていただきました。
初詣の皆様にも好評で、花手水の前
で撮影される姿も多くみられました。
次に、高橋様のフェイスブックから引用しておきます。

「お正月、大阪天満宮様の手水舎
を彩ります。今回は愛をテーマに装
花演出。またこの『宝石の煌き花手
水』にご協力・協賛頂きました関係
（開催期間、四月十五日～五月二十
八日）。

東京の神
田神社（通称、
神田明神）で
は、四年ぶ
りに斎行さ
れた「神田
祭」に合わ
せて、神田
明神資料館
において



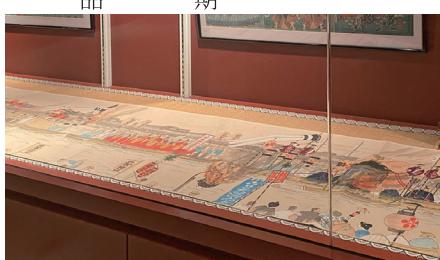
者すべての皆さまがまさにテーマの
とおり愛そのもので、感動しながら
準備を進めています。初詣の際に、
心躍り温まるフラワーアートをぜひ
ご体感ください。」

◆神田神社『日本の祭り展』に 天神祭の絵巻を出品



同展は、日本各地で伝承されてい
る祭礼について、日本三大祭、山車
屋台、神輿、神事などの角度から
「祭り」を紹介するもので、当宮か
らも「夏祭船渡御図(巻甲・巻乙)」の
絵巻、計四巻を貸し出しました。
この絵巻は、江之子島の船大工の
子孫である吉川進が、大正十年（一
九二二）の天神祭を描いたもので、
全長三十七mからなる「夏祭渡御図」には、陸渡御に奉仕する六百名
もの大子・崇敬者の様子が描かれ、
船や御迎え船で描いています。

今回、東京での初展示となりま
したが、実はこの夏には、本誌10頁
で紹介しています大阪
くらしの今
昔館の企画
展「天神祭
と都市の彩
り」（開催期
間、七月八
日～九月三
日）にも出品
する予定です。ぜひ、
ご詳覧ください。



九二二）の天神祭を描いたもので、
タッフ全員
で本殿にお
いて安全祈
願をしてい
ましたが。
開演に先
立つて、選
手・スタッフら全員に集合いただき、
当宮として、「流血・反則は絶対禁
止」や「場外乱闘も来場者の安全を
第一に！」などの諸注意を守ってい
ただくようにお伝えしました。

午後一時の開演でしたが、その二
時間前には客席の半分以上が埋まり、
開演時には立見が出る
盛況となり
ました。ま
た、試合と
は別に、子
どもを対象
とした「プ
ロレス教
室」も開か
れ、楽しい
ひと時とな
りました。



◆境内で奉納プロレス
四月三十日、大阪プロレスによる
「大阪天満宮大会」（観戦無料）が行
われました。
あいにく当日は朝から雨模様でし
たが、本殿西側（駐車場横）に特設
リングを設置し、その後、選手・ス

天満の天神さんと私(4)

株式会社 和田萬

取締役会長(西代目社長)
和田 悅治



創業者の名前より『萬次郎藏』と命名し、表札は寺井種伯宮司(現名譽宮司)さんに揮毫していただきました。

私は菅原町市の側から西へ太平橋を渡つた樋上町で生まれ育ちました。昭和四十年に菅原町に引っ越し今まで毎年七月二十五日を楽しみにしていました。天神祭の渡御列が家の前を通ります。東隣の昆布屋さん(尾形商店)が御鳳輦講の講元さんでした。渡御列が真ん前に止まり手打ちをした時には心が躍りました。我が家でも店内を片づけて絨毯を敷き屏風などで飾り付けました。

家業は明治十六年創業の乾物問屋でしたが、戦争で売る品物も蓄えも無くなりました。戦後三代目となる父・栄三が商売を再開、ほどなくして食品こまを主力として問屋からメークに転換しました。昭和三十年頃まで、店の前の堂島川でごまを洗い、河川敷にむしるを敷いて天日乾燥していました。後、淀川区に工場を建設、昭和四十年高速道路建設の為現在の菅原町に移転。父は天満か

ら離れては商いが出来ないと思い、苦労をして土地を購入しました。昭和四十七年に私悦治が入社。

境外の天満宮・天神祭(3)

天児屋根命神社の「天満宮」

境内末社「天満宮」

宮があります。去る昭和五十七年の九月二十三日に、御神縁により、当宮から御分霊を勧請されました。当宮の『昭和五十七年社務日誌』同日項に、次のような記録があります。

全国各地の神社を、祭神別の神社数でみると、第一位が八幡信仰系の七八一七社、第二位が伊勢信仰系で四四五社、そして第三位が菅原道

真公・天神様を祀る天神信仰系で、三九五三社を数えます。(神社本庁教學研究所研究室編『全国神社祭祀祭礼総合調査』一九九五年)。

この数には、当宮だけではなく、当宮から他社に分祀された天満宮も含まれています。連載第三回目となる今回は、そのうちの一社、天児屋根命神社の境内末社「天満宮」をご紹介します。

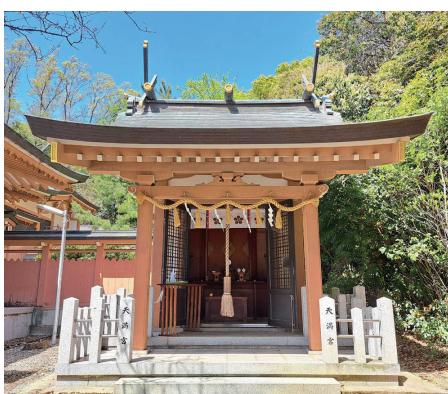
阪急箕面線「桜井駅」から徒歩三分の地にあり、神社の裏山には自然豊かな「瀬川北公園」が整備されています。お近くにお立ち寄りの際には、是非ご参拝ください。

一、大坂天満宮御祭神の御分霊奉戴に、天児屋根命神社より宮司他来宮。

その例祭は、毎年十月の第四日曜日に斎行され、また、正月一日には書初め大会も開催され、作品は御神前に奉納されます。

瀬川に鎮座し、地元の皆さんには「瀬川神社」の通称で親しまれています。その主祭神・天児屋根命は、中臣(藤原)鎌足公を祖とする藤原氏の祖先神です。

境内の井戸「龍の井」は、龍が井戸水を飲んで昇天したという伝承を持ち、近隣だけではなく遠方からの御参詣も絶えません。



社務所 電話番だより
よくあるお問い合わせ

『お七夜の命名式』

人生儀礼はどの時点から始まるのかと考えてみますと、懷妊時の着帯の儀からかもしれません、この世に誕生したところを始まりとするならば、お七夜の祝いが人生初の儀礼といえるのではないか。

お七夜（おしちや）とは、誕生から七日の夜に赤ちゃんの健やかな成長を願つて行うお祝いで、平安時代からあつたそうです。生まれた子に名前をつけて社会の一員として仲間になることを認めてもらう儀式だといわれています。

この日からお宮参りまでの約一ヶ月間、命名書を飾ります。昔は生まれたばかりの赤ちゃんの生育に不安があつたため、節目とする七日目を迎えたことをお祝いしたのが由来です。そこで、両親は子どもの名前を考えることになるのですが、姓名判断などをお願いしたり、名付け親を頼んで名前を付けてもらうこともあります。

名前の画数から吉凶を鑑定する占いのひとつである姓名判断の起源は、陰陽五行説を踏まえた中国漢代の相

字（そうじ）の法にあるとされており、これが日本に伝わり、鎌倉時代には字画から吉凶を判断する姓名字画相が流行したと言われています。

姓名学・姓名判断はもともと日本にあつた「言靈信仰（ことだましんこう）」に通ずるものがあり発展しましたと思われます。

明治八年（一八七五）の平民苗字必称義務令により、国民全員が公的

に苗字（名字）を名乗らねばならなくなりましたから、この時は、苗字の名乗りにも姓名判断が行われたのでしょうね。

近年は、キラキラネームのような伝統的でない当て字、外国人名、創作物の登場人物名などを用いた奇抜な名前が平成以降に増加しているようですが、そもそも、民法には命名行為について規定はありませんので、戸籍の名の欄には漢字の読み方が記載されません。このため、難解な読み方や、キラキラネームを付けることができるのです。

当宮では「撰名祈祷」という形で祝詞を奏上して、いくつかの候補から名前を選ぶ方式にさせていただきておりますが、それがどのような儀式かは非公開とさせていただいております。

いずれにしても、親から子どもへ人並の平和なくらしありがたくあります、また人によつては後世に永く残ることもあるのですからよく考えて命名してほしいですね。

渡り来る鍋鶴迎ふ住民の愛に育ちて日毎増えゆく

大阪天満宮献詠 風月社

令和四年七月～令和五年三月

令和五年二月兼題 梅

乾 恵子

令和四年七月兼題 乗物

佐野 秀子

令和五年三月兼題 鶯

北岡 由紀子

大歌舞伎わきたつ人氣はやしたて船のりこみを道頓堀川

鈴木 敬子

令和四年十二月兼題 歳の市

伊藤 凉子

令和四年九月兼題 蓮

沼ひとつ青葉に隠れ咲く
転法輪寺のはすのうす紅

佐野 秀子

令和五年一月兼題 新春

南口 一二美

令和四年九月兼題 大北 滋保

飛鳥路の白より白き石仏に
淡き光りの月のぼりけり

佐野 秀子

令和五年一月兼題 新春

南口 一二美

令和四年九月兼題 月

難波津に五色の水の放たれて
出初めの式に防災ちかふ

坂井田 仁子

令和五年一月兼題 新春

仁子

令和四年秋思祭兼題 鈴虫

みまつりの籠の鈴虫のきよらげく
すたけるままにさしのぼる月

佐野 秀子

令和五年一月兼題 新春

南口 一二美

令和四年秋思祭兼題 鈴虫

飛鳥路の白より白き石仏に
淡き光りの月のぼりけり

佐野 秀子

令和五年一月兼題 新春

南口 一二美

令和四年秋思祭兼題 鈴虫

みまつりの籠の鈴虫のきよらげく
すたけるままにさしのぼる月

坂井田 仁子

令和五年一月兼題 新春

仁子

令和四年秋思祭兼題 鈴虫

みまつりの籠の鈴虫のきよらげく
すたけるままにさしのぼる月

坂井田 仁子

令和五年一月兼題 新春

仁子

令和四年秋思祭兼題 鈴虫

舞楽の袖に夕風の吹く

松村 曜二

令和五年一月兼題 新春

忠津 清治

令和四年十月兼題 人

中瀬 央子

人並の平和なくらしありがたく
米寿を迎へ心新たに

家治 綾子

仁子

春の献血キャンペーン開催

境内の桜も見頃を迎えた去る四月六日、大阪天満ライオンズクラブ様主催による恒例の献血キャンペーンが開催されました。新型コロナナウイルス感染症の拡大の影響もあり、輸血用血液製剤の慢性的な在庫量不足が全国的に危惧されているさなかのキヤンペーンとなりました。



一刻も早く血液を必要とされる方々の一助になることができれば、平成二十六年から始まつたこの活動は、当宮境内に於いて、年二回のペースで続けられ、今年で九年目を迎えます。

当日は曇り空の下ではありました
が、クラブメンバーの精力的な呼びかけに、ご参拝を終えた多数の方々が献血バスに足を向けてくださいました。日本赤十字社によると、毎日一万三千人の献血協力が必要とされているそうです。尊い命を救うためには、献血は身近にできるボランティアです。これからも皆様の温かいご理解とご協力を願いました。

天満宮スカウト活動日誌

一シートと垂木を用いたテントやかまじ構築

◆ ガールスカウト大阪府第八十一団三月 入団式とフライアップ式（進級式）をしました。前日から泊まり、練習をし、当日はしつかり出来ました！ 制服を身に着け、新しいチーフを付けると、皆すっかりお姉さんになります。

四月 新しいパトロール（班）の名前やパトロール章（マーク）を決めました。ジュニア（小学校高学年）は体力を付けるために、大阪城公園まで歩きました。

五月 キャンプの準備です！ ブラウニー（小学校低学年）はアツアツのご飯をおにぎりにしました。ジュニアはカレーを作りました。次回の具材のリクエストもしつかりました！

十二月 もちつき・ワクワク自然大会を実施、天満宮境内に色々な体験ブースを設置、地域の方々や遠方からも参加頂きました。



◆ ボーイスカウト大阪第九十八団九月 ビーバー隊が天満宮境内で神社について学びつつ探検、キムスゲームなどスカウト定番ゲームで遊びました。

十月 カブ隊が一泊宿営、炊事訓練や追跡サインハイク等スカウト技能を磨きました。

十一月 ボーイ隊が地区技能大会に

大阪第十一団との合同班参加、ブル

ト自ら計画書の作成やキャンプ地、ルートの策定を行い、実施日の天候不順から延期・雨時のルート短縮を模索しながら一泊二日で約二十kmの踏破に成功しました。



令和五年度

大阪くらしの今昔館企画展

天神祭と都市の彩り

ミュージアムについて

大阪市立住まいのミュージアム（愛称・大阪くらしの今昔館）は、大阪の「住まいの歴史や文化」をテーマにした専門ミュージアムとして、平成十三年に開館しました。当館の見所の一つが、九階常設展示室に広がる江戸時代天保初年（一八三〇）頃

の大阪を実物大で再現した町並み展示です。大学の研究者が設計・監修し、数寄屋大工が伝統技術を用いて町家を建て、映画の美術監督が演出に携わっており、「大阪町三丁目」と名付けられています。

この展示室では、毎年春と秋に大規模な展示替えを行っており、四月から八月にかけては「夏祭りの飾り」と題し、祭り月である旧暦六月頃の大坂の町並みを再現しています。通りに町の紋をつけた高張り提灯が立ち並び、家々の軒下に家紋を染め抜いた幟幕（まんまく）が



江戸時代の大坂の町並み展示と「天神丸」

掛けられると、町全体がハレの日の装いに一変します。通りに面した町家の格子や建具は取り外されて開放的な空間となり、店の間には家宝の屏風やそれぞれに趣向を凝らした造り物（祭礼などの際に店の商品や日用品を使って造形した飾り物）が披露され、行く人々の眼を楽しませます。

更に通りには、嘉永五年（一八五二）に再建された壯麗な船形山車で

ある「天神丸」（大阪天満宮蔵・大阪市指定有形民俗文化財）が曳き出され、町の会所屋敷には絢爛豪華な「御迎え人形」（大阪天満宮蔵・大阪府指定有形民俗文化財）が登場し、祭り日の風景を一層華やかに演出します。

企画展の開催

常設展示室での町並み展示に加え、当館では令和五年七月八日（土）から

九月三日（日）までの期間中、八階企画展示室において、大阪で最大規模の都市祭礼である天神祭にスポットをあてた展覧会「天神祭と都市の彩り」を開催します。本展では大阪天

満宮にもご協力をいただき、初公開資料を含めた天神祭に関する貴重資料や、現存する御迎え人形の一部を特別展示します。また当館で開館以来収集してきたコレクションの中から、納涼や夏祭りにちなんだ絵画資料などをあわせて展示し、円熟した町人文化のもとで育まれてきた都市祭礼の伝統とその魅力を紹介します。

出品資料紹介

●「浪速勝景帖」五井金水 筆（当館蔵）

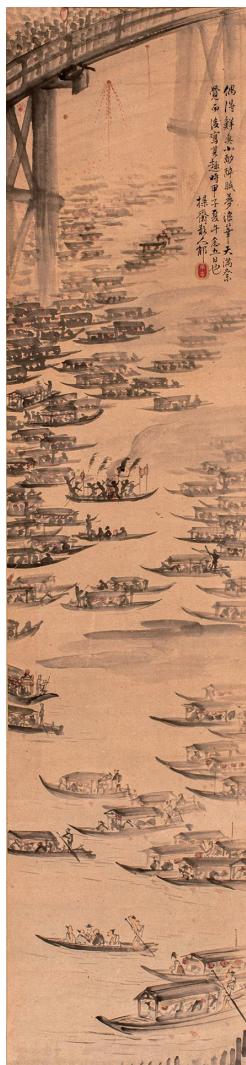
明治から昭和初期にかけて活躍した、京都の四条派の流れを汲む大阪出身の画家、五井金水（一八七九～一九四二）による作品で、船渡御の



会所屋敷に展示された「御迎え人形 酒田公時」



「松竹梅蒔絵瓶子」



「天神祭図」

●「松竹梅蒔絵瓶子」（大阪天満宮蔵）
大阪天満宮に伝わった一対からな
人形図絵』が刊行されており、本作

一場面を赤と青を中心とした鮮やかな色彩で描いています。御迎え船の帆柱の先端に取り付けられた等身大の恵比須人形は完全な姿では現存しておらず、当時の状況を知る手掛かりの一つとなっています。



「浪速勝景帖」（天神祭）

研究 上方』（第百十五号・当館蔵）
昭和十五年七月に発行された『郷土

もまた江戸時代において天神祭の華やかさが最高潮に達しつつあった時期の作品として注目されます。



『郷土研究 上方』（第百十五号）

画面手前の船には三昧線を手に接待をする女性や棹を持つ船頭の姿などが具体的に見えますが、奥に向かうにつれて船の描写は勢いのある墨技法により縁起物である松竹梅を描いています。附属する外箱には弘化二年（一八四五）に奉納されたことを示す墨書きがあり、その製作年を知ることができます。

-

研究 上方』（第百十五号・当館蔵）
江戸後期から明治にかけて活躍した大阪出身の画家、酒井楳齋（一八二八～没年不詳）による元治元年（一八六四）の作品。花火見物のためでしょうか、大川の川面に数えきれないほどの屋形船が浮かび、橋の上にも人々がひしめき合ふように集まっている様子が描かれています。

本展ではこのほかにも天神祭や阪の夏の風俗に関連する資料を多数展示します。ぜひ会場で華やかな祭礼の雰囲気をお楽しみください。

大阪くらしの今昔館学芸員 上田祥悟

画面手前の船には三昧線を手に接待をする女性や棹を持つ船頭の姿などが具体的に見えますが、奥に向かうにつれて船の描写は勢いのある墨技法により縁起物である松竹梅を描いています。附属する外箱には弘化二年（一八四五）に奉納されたことを示す墨書きがあり、その製作年を知ることができます。

-

人事任免

《昇進》

権爾宣 今井 美里
長谷川 将大

出仕 渡邊 悠
令和四年十月一日付

事務職 塩見 樹
令和五年一月二十五日付

巫女 吉田 みり
令和五年四月一日付



参事 稲原 亨亮

巫女 笹尾 真鈴

《新任》

権爾宣 鈴木 秀法

禰宜 菅野 喬紘
川井 義晴
須山 理絵子
白杵 浩秀
松尾 真奈

令和五年四月一日付

事務職 藤井 拓郎
令和五年一月二十五日付

禰宜 糸数 智子
港区 住吉神社へ
令和五年三月三十一日付

令和五年四月一日付

《転任》



巫女 吉田 みり
令和五年四月一日付

出仕 成田 采弥佳
令和四年十月三十一日付

出仕 為我井 柚衣
令和四年十一月三十日付

出仕 近江 晴子
文化研究所研究員
西畑 爽子
永里 歩花
令和五年三月三十一日付

大阪天満宮社報

てんまでんじん 第83号

令和5年5月25日印刷

令和5年5月31日発行

発行人 寺井 種治

発行所 大阪天満宮社務所

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-1-8

TEL 06-6353-0025

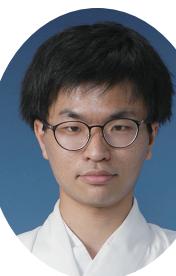
印刷所 木村印刷株式会社

令和四年十月一日付



事務職

大村 高嗣



事務職

藤井 拓郎



事務職

塩見 樹

巫女

吉田 みり

《退任》

禰宜 糸数 智子
港区 住吉神社へ
令和五年三月三十一日付

令和五年四月一日付

そのうえで、天神祭が、皆さまにとりまして、欠かすことのできない夏の風物詩であることを再認識いただけることを願っています。

ようやく、新型コロナもインフルエンザなどと同じ「5類」に移行し、新たな局面に入りました。
この三年余りの間、当宮においては、本号2頁に宮司も記しておりましたように、コロナ禍における祭儀の在り方を真剣に考えてきました。

本年七月の天神祭を斎行するにあたっても、コロナがゼロリスクになつたなどと安易に考えることなく、個々人による感染対策がより求められることを認識しながら、ご奉仕したいと考えております。

そのうえで、天神祭が、皆さまにとりまして、欠かすことのできない夏の風物詩であることを再認識いただけることを願っています。

編集後記